

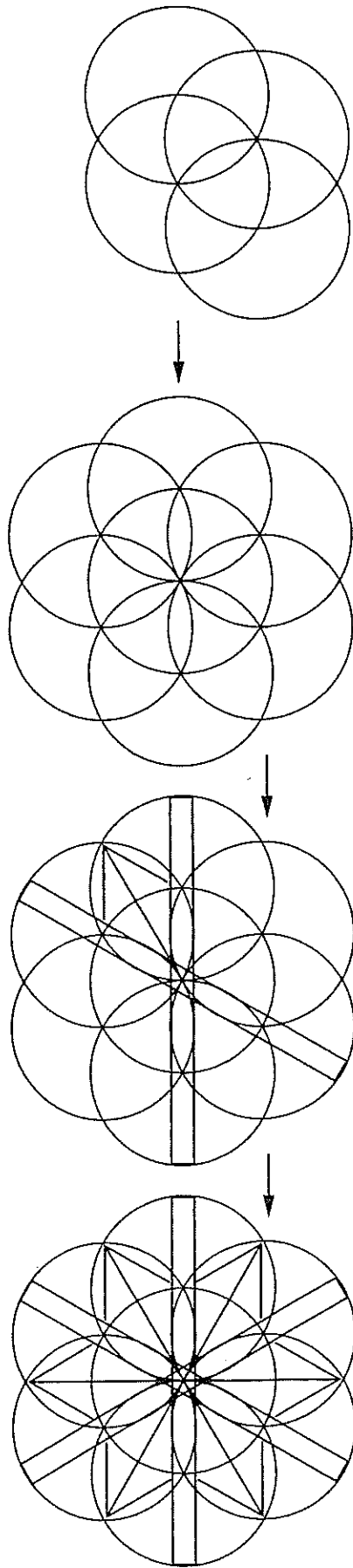
校章について

本校の校章は、本校が明治35年（1902年）に「秋田県立本荘中学校」として創設されたときに制定されましたが、それ以来、120年間変わっていません。当たり前のように思えるかもしれませんが、旧制中学校の校章は「中」の字を図案化したものや、「中」の字そのものを取り入れたものが多数派でした。そのような学校は、昭和23年の学制改革により旧制中学校が新制高等学校に移行した際に、何らかの形で校章を変更する必要に迫られたわけです。本校の校章のように全く文字を使わずにその学校の教育が目指すものを表現しているデザインは少数であったとのことですが、それゆえに今までずっと変わらずに受け継がれています。

校章の表す意味については、学校要覧に「霊峰鳥海の千古の雪をかたどり、その高貴、潔白、清浄、すなわち人間の追求する価値、真、善、美をあらわす。」とあります。しかし、この校章を考案した人が誰なのかについては、それを確定する決定的な根拠は残念ながら無いそうです。最も有力なのが、本校創立とほぼ同時に赴任され、約3年間教壇に立たれた美術の森川安次先生である、という説です。これが本当だとすると、前年に東京芸術学校（現在の東京芸術大学）を卒業したばかりの森川先生が本荘中学校に着任したのが明治35年5月23日、開校式は同年5月28日で、当日の写真には大きく掲げられた校章も写っていることから、わずか5日足らずでこの校章を考案したことになります。昭和4年に「本荘中学校沿革史」を編纂するにあたって、当時森川先生の授業を受けた卒業生からも聞き取りを行ったそうですが、残念ながら決定づける証言は得られなかったとのこと。ただ、森川先生が授業で、定規とコンパスを用いて校章を描く手ほどきを生徒に対して行ったとの話が残っており、当時唯一の美術教師だったことと併せて「森川説」の根拠になっているようです。ちなみに、「八十年史」「百年史」には「校章のかきかた」が掲載されています（次ページ参照）。現在職員玄関に、明治45年に本校創立10周年を記念して作成された初代校旗と旗竿が展示してありますが、どちらも校章の「棒」の先端が丸みを帯びています。この「校章のかきかた」が影響しているのではないかと、個人的には考えています。

当時の生徒と同窓生が白銀雪華の校章にいかにも愛着と誇りを持っていたかを示すエピソードとして、「帽章問題」があります。本校創立当初、学生帽の帽章は校章と同一のものでしたが、第3代校長が帽章を「『中』の字に鶴を配した」デザインに独断で変更したところ、在校生及び同窓会から猛反発が起こり、その後に着任した第4代校長が在校生及び同窓会の意を汲んで元通りに戻した、というものです。この「帽章問題」の渦中に卒業した第6期生の卒業記念写真は、現在本校の事務室前に飾ってある第55期生までの写真の中に見ることができますが、全員無帽で写っており、「第六期生が示した鶴の帽章に対する無言の抵抗の姿だったのである。」と「八十年史」には記載されています。

（文責：校長 熊澤耕生）



校章のかきかた